

| | | | | | | |
|--|----|------|----|-----|----|----|
| 促成栽培トマトにおける定植時期の遅延化による黄化葉巻病の発生抑制 | | | | | | |
| [要約]促成栽培トマトでは、定植時期が遅くなるほど、黄化葉巻病を媒介するシルバーリーフコナジラミの発生が減少し、本病の発生も少なくなることから、定植時期の遅延化により本病の発生を耕種的に抑制することができる。 | | | | | | |
| 総合農林試験場・環境部・病害虫科 | 専門 | 作物病害 | 対象 | 果菜類 | 分類 | 指導 |
| 資料名：平成13年度普通作・野菜等病害虫試験成績書 | | | | | | |

[背景・ねらい]

トマト黄化葉巻病は、Tomato yellow leaf curl virus(TYLCV)を病原とするウイルス病で、1996年に本県ならびに愛知県、静岡県で発生が確認された新しい病害である。本県では、現在4市9町で本病の発生が認められ、1999年には新たにトルコギキョウにも発生するなど問題が拡大している。本ウイルスはシルバーリーフコナジラミによって媒介され、感染したトマトは新葉が黄化、萎縮して生長が止まり、着果不良になるため、長期間栽培を行う促成栽培で大きな被害を与えている。しかし、病害虫防除所の現地調査（1998年、大村市）によると、夏から秋にかけての定植時期が遅いほど、本病の発生は少ない傾向にあった。そこで、促成栽培トマトの定植時期別における、本病と媒介虫であるシルバーリーフコナジラミの発生の推移を明らかにして、本病の防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

- 1．促成栽培トマトにおいて、定植時期が遅くなるほど、シルバーリーフコナジラミの発生は減少し、特に10月中旬以降の植付けでは少ない（図1）。
- 2．黄化葉巻病も定植時期が遅くなるほど、発病株率が減少する傾向にある（図2）。
- 3．以上により、促成栽培トマトでは、定植時期を遅延化することにより、本病の発生を耕種的に抑制することができる。

[成果の活用面・留意点]

- 1．施設開口部へのネット展張や媒介虫の薬剤防除など、他の防除法と組み合わせることにより、さらなる本病の発生抑制効果が期待できる。
- 2．定植時期の遅延化により本病の発生を抑制することができるが、導入に当たってはトマトの収量や収益など、経営面を考慮する必要がある。
- 3．育苗期間中の感染防止が肝要である。

[具体的データ]

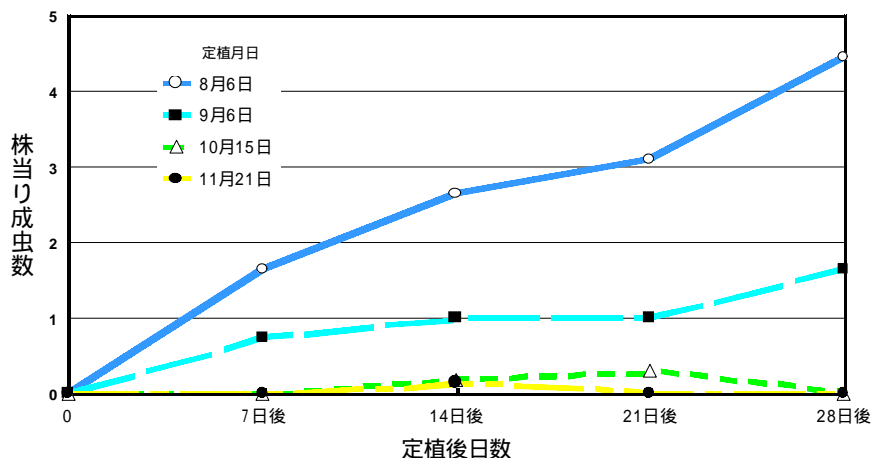


図1 促成栽培トマトにおける定植時期別シルバーリーフコナジラミ成虫数の発生推移

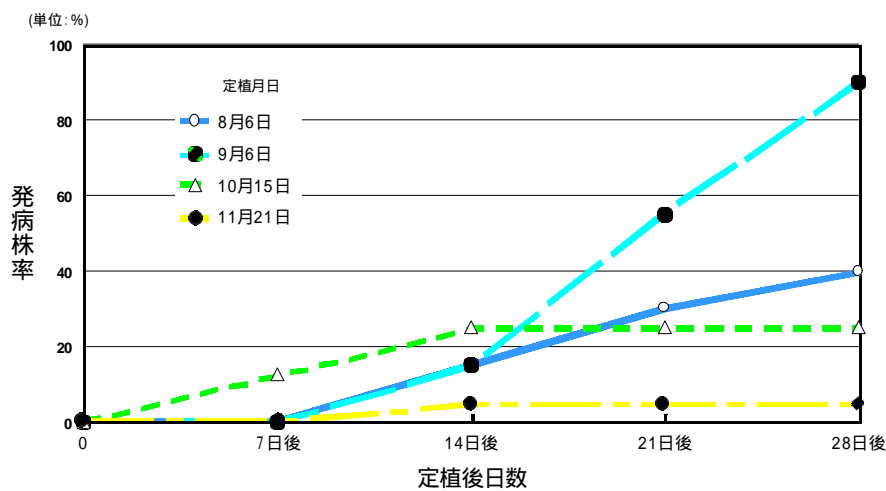


図2 促成栽培トマトにおける定植時期別の黄化葉巻病発生推移

[その他]

研究課題名：トマト黄化葉巻病の防除技術確立

予算区分：国庫（地域新技術）

研究期間：平成13年度（平成13～15年）

研究担当者：内川敬介、小川恭弘